

# ファシリテーション研究とは何か： 6つの学問領域における先行文献レビューを比較して

奥本 京子・前田 美子・中西 美和  
船越 多枝・関根 聡・上野 育子

## What Is Facilitation Research? Comparison of Literature Review over Six Academic Disciplines

Okumoto Kyoko, Maeda Mitsuko, Nakanishi Miwa,  
Funakoshi Tae, Sekine Akira, Ueno Ikuko

### 抄 録

本研究の目的はファシリテーション研究の特徴を学際的な視点から明らかにすることである。本研究では、まず、「ファシリテーションとは何か」について、6つの学問・研究領域の先行文献をレビューする。レビューの対象となった領域は、社会学、国際開発学、平和学、心理学、経営学、英語教育学である。次に、それらの先行文献レビューを比較し、「ファシリテーション研究とはどのような研究か」について考察する。その結果、ファシリテーション研究の特徴として、次の3つのことが示された。第1に、議論の深度や方向性が、各領域で異なる。第2に、ファシリテーションという事象は、さまざまな側面から分析・考察できる。第3に、各領域におけるファシリテーションの議論においては、共通のルーツや相互の影響が見受けられる。

**キーワード：**ファシリテーション、プロセス、介入、先行文献レビュー、比較研究  
(2021年9月24日受理)

### Abstract

The purpose of this study is to identify the characteristics of research on facilitation from the interdisciplinary perspective. With regard to what facilitation is, the study reviews the literature across six academic and research areas: sociology, international development studies, peace studies, psychology, business management, and English pedagogy. It then compares the literature reviews to see “what kind of research is essentially research on facilitation.” As a result, the following three characteristics of research on facilitation have been identified. First, the depth and direction of the research differ in each area. Second, the phenomenon of facilitation can be analyzed and considered from various aspects. Third, research on facilitation in each area sometimes exhibits common roots and influences each other.

**Keywords:** facilitation, process, intervention, literature review, comparative studies

(Received September 24, 2021)

## 1. はじめに

「ファシリテーション (facilitation)」(名詞)や「ファシリテート (facilitate)」(動詞)は、ラテン語の“facilis”すなわち「容易にすること」に由来する。一般的には、コミュニケーションや理解を「促進する」「助ける」また「楽にする」などの意味を持つ。「ファシリテーター (facilitator)」は、ファシリテートする人を指す。

ファシリテーションは、教育・学習、村落開発の現場において用いられることが多いが、近年は企業や市民社会、NGOなどの組織運営等においても活用されている。一般に、グループ・ワークなどを取り入れた、双方向性の強い学び・作業・会議の時空間(場)において、ファシリテーターは、その参加者と共に、あるいは参加者の助けを借りて、混乱する議論を整理・確認したり、多様なことから可視化・顕在化・言語化したりする。

実践としてのファシリテーションが、さまざまな場において見られるにもかかわらず、ファシリテーションに関する学術的議論は必ずしも活発に行われてきたわけではない。たとえ、議論がなされていたとしても、各学問・研究領域内にとどまり、学際的な視点から考察するという試みはほとんどなされてこなかった。

このような問題意識に基づき、本稿は学際的視点からファシリテーション研究の特徴について明らかにすることを目的とした。まず、「ファシリテーションとは何か」について、6つの学問・研究領域の先行文献をレビューした。次に、これらの先行文献レビューを比較し、「ファシリテーション研究とはどのような研究か」について考察した。

## 2. ファシリテーションとは何か

ここでは、「ファシリテーションとは何か」について、社会学、国際開発学、平和学、心理学、経営学、英語教育学の各学問・研究領域の先行文献をレビューする。

### 2.1. 社会学のファシリテーション：位置づけと方向性

社会学には他者との関係性や相互作用を対象にする研究は多いが、ファシリテーションという言葉との関連性で調べていくと、この領域内での研究がまだ浅いことを実感する。2015年9月に開催された第88回日本社会学会テーマセッション「専門教育における社会学」の報告で、中澤秀雄も、「戦後社会学において、ワークショップを初め何らかの知的創造を目指す場のあり方について、あるいはファシリテーションという技術について、議論してきた形跡は殆どない」(中澤 2016:7)と述べている。本節では、少ない先行文献をたどりながら、社会学の分野から見たファシリテーションの位置づけや方向性について考察していく。

中澤は、ファシリテーターの役割について、次のように述べている。

その場で観察し見抜き、即興も含めて運営方法を臨機応変に考え、その場の化学反応を促すような道具箱を多数持っていなければならない。どのような観客がその場にいて、何を求めており、逆に話を提供する側はどんなスキルやコンテンツを持っていて、それをどのように展開させると最大のパフォーマンスを発揮するのか。どのように話の順番を組み立て、どのように司会が介入し、どのように場の定義を説明すると参加者の満足度が高まるのか。さらには、どうすれば創発的な場となり、新しい価値が生み出されるのか。これら正解のない問いに対する、「いま・ここ」での最適解を瞬時に判断し、参加者が納得するような場の定義を与え、時間・空間・コミュニケーションという有限な資源をコントロールしていく、この高度な職人芸がファシリテーション技術である。(中澤 2016 : 6)

ここから、グループに対しての一定の距離感やメンバーとの非同一性、グループコントロールとグループに対する奉仕の側面などが見えてくる。さらに、ファシリテーターは、高度な援助技術を身につけていなければ、役割遂行が難しいという印象を与える。

しかし他方で、中澤は、上記の技術とは別の側面から社会学がめざすファシリテーションについて、「社会学知が目指すものは、社会的合理性として表現できるコンテンツの発見である。この地点で、一般的なファシリテーション学からは分岐する。社会的合理性を、単なる上から目線の制度にするのではなく、社会のメンバーと協働しながらいかに発見していくか、そのための知の体系をどのように編み出すか、というのが取り組むべき固有の問題だ」(中澤 2016 : 12) としている。

社会的合理性については、藤垣裕子は、次のように述べている。

科学者が確実な予測を行えるなら、科学的妥当性に基づいた「科学的合理性」(scientific rationality) にのっとって、公共の判断もつけられよう。しかし科学者にも予測がつかない問題を公共的に解決しなくてはならないときには、科学的合理性は使えなくなる。それに代わって、「社会的合理性」(social rationality) というものを公共の合意として作っていかなくてはならない。(藤垣 2002 : 1248)

この社会的合理性は、社会調査、特に質的調査の聞き取りの方法とも一部関連してくる。個々の体験を多角的に深く考察し理解すること、また、その背景や深層部分に何が存在しているかを明確にしたり、因果関係を把握したり、また説明することを可能にする方法である。岸政彦は、質的調査のめざすものとして、「私たちとは縁のない人々の、『一見すると』不合理な行為の背後にある『他者の合理性』を、誰にもわかる形で記述し、説明し、解釈すること」(岸 2016 : 29) であると説明している。

これらの知見から、ファシリテーションには、科学的な立場と公共的な立場を独立させたり繋いだりする側面と、加えて、個々人の行為の背景にある理由や意味、また集団や組織、地域社会に発生する課題における、それぞれの立場の背景にある社会的合理性を明らかにしていく役割があると言えよう。例えば、ジェンダーの関係性、環境問題といった課題にも、そこに関わる人々それぞれの信念や社会的合理性があり、それが相反したり対

立したりするからこそ、困難さを生じさせている。また課題について、科学的に証明された構造や理論、摩擦の緩和に結びつく知見が伝えられたとしても、直ぐに解決することはない。そこでファシリテーションは、対立している事柄の背景や構造を整理する役割、その上で社会的合理性の形成へと導く役割を担っている。これは上掲した中澤の「社会的合理性を、社会のメンバーと協働しながらいかに発見していくか、そのための知の体系をどのように編み出すか」(中澤 2016:12) といった考えにも繋がっていく。

この知を生み出すプロセス(過程)を研究の対象としている教育社会学では、ファシリテーションを次のように取り上げている。日本教育社会学会第70回大会課題Ⅲ・公開研究会において、井上義和は、ファシリテーションの実践について、「教育機関を通じて社会化・正当化されると、社会のなかでのコミュニケーションが、ファシリテーション機能とか、ファシリテーターの存在を前提とするようになる。言い換えると、ファシリテーターへの依存度が強まる」、加えて、「ファシリテーターの本来の役割は、(全体を特定方向に誘導する)場の支配ではなく、(各人の可能性を存分に発揮させる)場のホールドである。“コミュ力”がコミュニケーションを支配抑圧する弱肉強食の世界から、“ファシ力”でコミュニケーション格差を最小化する自由と創造の世界に移行できる」、また、「特定の人物(ファシリテーター)に権限を委譲するかわりに、メンバーには自由と創造のコミュニケーション環境が保障される」(井上 2018:8)と述べている。

これらの先行研究から、ファシリテーションは時間や空間を参加者間で共有すること、他者と協働することが前提となっている。そして、その場において力による格差を最小化し、社会的合理性を求めるプロセスに、ファシリテーションの役割の意味がみえてくる。さらに付け加えるとすれば、参加集団内の対等性の確保、方向性や目標の共有、自由な議論、規範の設定による場(環境)の保持なども、その機能として必要になると考えられる。

## 2. 2. 国際開発学のファシリテーション：その概念に関する考察

本節では、国際開発(開発援助、国際協力)学の文脈におけるファシリテーションの概念について考察する。

国際開発の文脈におけるファシリテーションの概念の生みの親は、英国サセックス大学開発研究所のロバート・チェンバースである。パウロ・フレイレの思想の影響を受け、PRA(参加型農村調査:Participatory Rural Appraisal)やPLA(参加型学習行動:Participatory Learning and Action)などの参加型開発手法を提唱したことでよく知られている。チェンバース(2000)は、開発専門家などの援助者に、従来担ってきた指導的・権威的・支配的な役割を改め、地域住民の主体的な参加プロセスを促進するファシリテーターとしての役割を求めた。チェンバースは、ファシリテーターがすべきことを次のように述べている。

ファシリテーターは、敬意を表し、よい人間関係を構築し、先入観を捨て、棒を手渡し、見て、聞いて、学び、失敗から学び、自らに批判的で自分自身を見つめ、柔軟性を持ち、助け、分かち合い、そして正直であるべきである。(チェンバース 2004:42)  
すなわち、チェンバースが提唱したファシリテーションの概念は、単に外部者(援助者)

の介入の方法を示すだけでなく、彼らの態度や姿勢を示すものであった。

しかし、世界各地で参加型開発の実践が進み、多様な参加型開発の手法が開発されるにつれ、援助団体や援助関係者によって具体的にファシリテーションをどのように行っていくのか、テクニックとしてのファシリテーションに関心が向けられるようになった。ファシリテーター養成のための研修が広く行われるようになり、ファシリテーションに関する解説書や研修教材が数多く執筆された（例えば、日本では FASID 2004）。

同時に、参加型開発に対する批判の声が上がるようになり、ファシリテーションそのものへの批判につながっていった。ビル・クック & ウマ・コタリ (Cooke & Kothari 2001) は、参加型開発を持ち込むファシリテーターが地域住民による既存の合理的な意思決定プロセスを踏みにじっているのではないかという問題意識などから、*Participation: The New Tyranny?* (参加：形を変えた専制?) を出版した。イラン・カプーア (Kapoor 2002) は、ファシリテーターだけに与えられた自由裁量性という特権が、他の参加者の関与をコントロールしてしまう危険性を指摘した。チャンバースが警鐘を鳴らしていた「ファシピュレーション」(facilitation と manipulation とからなる造語で、参加者を誘導・操作すること) が、開発援助の現場で起きることは不可避であることも報告された（例えば、White & Pettit 2004）。

こうした批判を乗り越えようとする試み（例えば、ヒッキー & モハン 2008；和田・中田 2010）もあり、参加型開発やファシリテーションの概念を再検討する議論が活発になった。野田直人（2003）は、住民の主体性を尊重するという理念を置き去りにした参加型開発手法の実践を参加型開発と呼ぶべきでないと主張する。また、太田美帆（2004）は、ファシリテーター養成研修が、参加型開発の理念を抜きにしてテクニックの習得を重視し、住民と一緒にアクティビティをすることがファシリテーションであるという誤解を与えている、と批判する。彼らの主張に基づけば、理念を伴わないファシリテーションはファシリテーションと呼ぶべきではないことになる。一方で、佐藤寛（2003）は、開発援助の現場で起きている事象を研究対象とする開発援助研究においては、理念なき参加型手法の実践でも参加型開発として考察の対象となりうるという立場である。この考えに従えば、実際にファシリテーションと呼ばれている介入を、本物のファシリテーションではないと研究対象から除外することはできない。

以上のように、国際開発の文脈におけるファシリテーションの概念は、必ずしも研究者・実務家の間で一致しているわけではない。興味深いのは、ファシリテーションをポジティブな結果を導く介入と捉える論者もいれば、ネガティブな影響を与える介入と批判する論者もいることである。

### 2. 3. 平和学ファシリテーション：平和・紛争解決教育、調停・対話の現場において

平和学領域では、基礎概念である平和・暴力・コンフリクト（紛争・対立・葛藤）をめぐる理解と、その上に成り立つ平和創造・暴力削減・紛争解決を中心に研究・実践がなさ

れる。そのため、平和学は平和紛争学とも呼ばれる。実践現場は、平和教育・トレーニングや、武力紛争から日常の対立までの紛争解決・交渉・調停である。平和教育現場と紛争現場でのファシリテーション（または調停すなわちメディエーション）は相互に応用される。本節では、平和学におけるファシリテーションのあり方をめぐる理論・方法論についての先行研究を解説する。

平和学のパイオニアの1人であるノルウェーのヨハン・ガルトゥング（2014）は、コンフリクトを平和的手段によって解決・転換するトランセンド理論を開発し、トランセンド（超越）地点を達成する手段としての対話を模索する。紛争の複数の当事者のうち1者が「勝つ（負ける）」との二元論的発想を脱却し、すべての当事者が等しく何かを得て、各自の目標に近づくために、外部の当事者（outside party）は、ファシリテーター（メディエーター）として介入し、徐々に紛争それ自体に関わることで当事者と成っていく。また、各当事者に等しく接し、目標・必要を聞き出し、当事者が紛争をトランスフォーム（転換）することを助ける。

北米のメノナイト系のグループも平和紛争理論を開発してきた。ロン・クレイビルとイヴリン・ライト（2006）によれば、ファシリテーターは、小グループでの議論や身体を使ったグループ・ワークをワークショップで効果的に行い、議論の内容には中立性を保持し、プロセスの引導役を担うという。その技術は、参加者が相互に明確に聞き合うことを助け、参加者の多様で多数の声のバランスを取り、多くの発想を生かす議論の道筋を見つけ、そのプロセスを手放さず留まれるよう助け、強い感情・声の抑揚に気付き、グループが共に活動する能力があるとの確信を徐々に構築する、等である（Kraybill & Wright 2006: 7-13）。

これらの平和学領域におけるファシリテーションでは、参加者のストーリーをサークルの中で共有するサークル・プロセスを用いることが多い。これは、対話や転換のための手法であり、北米やニュージーランド等の先住民族の古来の知恵に由来し、特に、修復的正義の分野で活用される。ハワード・ゼアは、当事者の多くの声を聴き取るために、人々のニーズやロールを重視するという（ゼア 2008: 17-18）。というのも、近現代社会では、応報的正義に基づき加害者の「悪事」に対して懲罰を与え、被害者はほとんど顧みられず、ましてや、両者の暮らすコミュニティ自体の傷つきは、全く注目されない。加えて、加害者の中の暴力の連鎖に起因する被害性等も考察されない。サークル・プロセスでは、キーパーと呼ばれるファシリテーターが全体のプロセスをケアし、安心感のもとに参加者は衡平に語り合う。ケイ・プラニスによれば、このプロセスでは、歴史や経験が語られ、参加者が自身の状況を理解し進む道を模索するという（Pranis 2005: 39-40）。それは自己内対話のプロセスである。

平和学ファシリテーションに影響を与えた理論・方法論にも触れておく。アウグスト・ボアール（1984）は、ブラジル民衆文化運動に参加し、被抑圧者が演劇の力と言語をその手に奪い返し、自己を解放する手法を編み出した。演技者と観客がアクターとなり、問題の解決方法を模索する演劇だ。思考する社会的主体となった市民アクターは、演劇中の行為

を現実社会の中で実践しようとする。ポアール演劇の手法は、権威による差異（教師／生徒、俳優／観客）及び日常に偏在する抑圧を意識化し、行為者としての観客を生む。ジョーカーと呼ばれるファシリテーターは、フォーラムシアター、彫像演劇、討論劇、見えない演劇等の手法で、プロセスに焦点を当て、社会・世界の中の構造的・文化的暴力をあぶり出す。

心理学系理論からの影響も大きい。米国の臨床心理学者、マーシャル・B・ローゼンバーグ（2012）の非暴力コミュニケーションは、人の内と外に平和をつくる手法として開発された。ファシリテーターは、観察、感情、ニーズ、リクエストの4要素から、個人レベルから社会・世界レベルまでの人間関係に注目し、自身の内的対話や、他者の言葉の意図の推測、他者との対話を励行する。誤解や偏見を見極め、気持ちや価値を明確にし、真に望むことを見出し、自らの力で実現する原動力を生む。他者の内面を侵さず、生来備わる力を奪わず、自分と他者を尊重し、非暴力を軸とする。

また、米国のアーノルド・ミンデルによるプロセス思考心理学は、プロセスワークと呼ぶ手法の中でもグローバルな問題と絡むものを、特にワールドワークと名付け、コンフリクトのワークをファシリテーターが手助けする。人の内面と社会という外側とを繋ぐために、参加者自身の変性意識状態、恐れ、怒り、混乱、熱狂等と取り組み、①思い出す、②感じる、③引き下がる、④怒る、⑤敵を見る、⑥敵を援助する、⑦敵に攻撃させる、⑧敵に開かれる、⑨援助者とワークする、といった自己内のワークを行い、⑩これらだけを解決策として理解しない、とする（ミンデル 2013：185-189）。

最後に、日本平和学会（2021）では、新たな平和教育ファシリテーションのあり方を「やりとり力」という概念を軸に深化してきた。「やる」力とは、話す・アウトプットする・語る力である。「とる」力とは、聞く・インプットする・聴く力を指す。この両方が交互に循環することで、平和的関係の構築が可能となり、対話のプロセスが徐々に実現する。本節に記した理論・方法論等を活用し、日本の平和教育におけるファシリテーションのあり方を模索してきた（例えば、奥本 2022）。

このように、平和学においては、多種多様なファシリテーション手法を中心に研究・実践が行われている。ファシリテーションのダイナミズムの中で、参加者は自身と他者の考え方や感じ方をめぐり自由になる。ファシリテーターはそれらに共感を示す。繋がり合うプロセスの中で、相互への信頼が醸成され、紛争解決・平和創造のための創造的なビジョンが生まれていくのである。

## 2. 4. 心理学のファシリテーション：ヒューマニスティック・グループアプローチに着目して

「最善のリーダーとは、人々がその存在をほとんど気にしないリーダーである。あまり良くないのは、人々が口々賞賛するリーダーである。最悪なのは、人々が軽蔑するリーダーである。良いリーダーは、多くを語らず、なすべきをなした時、その仕事が終わり、人々は自分たちがやったと言う」（野島 2011：53）。これはカール・ロジャーズのリーダー論の

中の言葉である。

心理学の「第3勢力」と呼ばれる人間性心理学は、人間の全体性、主体性を重視する立場であり、この人間理解を基盤とし、自己成長、自他理解、人間関係訓練、そして出会いなどを旨とするグループアプローチをヒューマニスティック・グループアプローチという。人間性心理学によると、グループ・ファシリテーションは、「グループや集団を促進する働きかけやあり方」と定義され（高橋 2012:284）、その機能を担う人をファシリテーターと呼ぶ。ファシリテーターに求められる機能は、流派によって水準も種類も多岐に渡る。それらを網羅することは困難であるが、本節では、主に先行文献に基づき、ヒューマニスティック・グループアプローチにおけるファシリテーターに通底すると考えられる機能を概観する。

**安心・信頼の雰囲気形成** グループの中で、自己開示やフィードバック、他者との率直な関わり、あるいは自分の課題に取り組む作業などが行われていくプロセスで、自己への気づき、自他理解、個人やグループの成長が叶う。このようなプロセスが生まれるためには、「このグループでなら」と、メンバーにとってグループが、安心と信頼をもたらす場となっていることが、大きな支えとなる。このファシリテーターの機能は、グループの安心・信頼の雰囲気形成（野島 2011:45）、グループへの所属感を保証する（村山 2014:42）、迅速なグループの治療的雰囲気の確立（Aveline 1993）、グループの様々な不安の受容（contain）（Aveline 1993）などとして、指摘されている。

**関わり方・スタンス** 観察と参加（Chen & Rybak 2003:105-106）、つまり、ファシリテーターでありながら参加者になるというスタンスでグループに関わることがある。エンカウンター・グループでは、ファシリテーターがメンバーになって、メンバーがファシリテーションを発揮できるようになっていくこと、この現象こそが本質と考えられている（野島 2011:45）。さらに、個人とグループの両方への関心（Scheidlinger 1982:101）を持ちながら、自己開示（Chen & Rybak 2003:236-240）や here and now のフィードバック（Chen & Rybak 2003:235）を行ったり、ファシリテーターのその場の感触を活用（村山 2014:45）したりしながら、メンバーやグループに関わっていく。一方、例えばゲシュタルト・グループなどのセラピーグループでは、ファシリテーターは主にセラピストとして機能する必要がある、一貫してセラピスト・クライアント関係、つまり縦の関係の継続が求められる。

**メンバーのチャレンジ促進** 個人やグループの成長を叶えるために、ファシリテーターは、個人の自己理解の援助（野島 2011:45）、相互作用の活性化（野島 2011:45）、感情表出や悩みの開示の促進（Scheidlinger 1982:101）を担う。

**心理的損傷へのケア** グループでは、here and now での体験が大切に焦点づけられるため、生身の自分でグループに関与せざるを得ず、ポジティブであれネガティブであれ、その影響もまた生身で受けることになる。よって、グループの中で生じたことから、メンバーやグループを守ることもファシリテーターの重要な役割である。この機能は、グループからの脱落・心理的損傷の防止（野島 2011:45）、攻撃された人を守る（村山 2014:43）、自

己開示のダメージと自尊心の損失からの保護（Aveline 1993）として述べられている。

**マネジメント** グループの中には、実際に何かを体験することをねらいとした課題（エクササイズ）を用いるものがある。その際、ファシリテーターは、課題を効果的かつ円滑に遂行するマネジメント機能を担う。他のグループも含めてグループ全体を見て（村山 2014：41）、グループやセッションの構造化（Scheidlinger 1982：100-101）を行い、課題実施の際には、ファシリテーターがまず実演してみせたり（村山 2014：45）、時間内で取り組める課題へ誘導（Aveline 1993）したりする。

**在り方** 技能よりも、ファシリテーターの態度や在り方が、ファシリテーター機能の中心であるという考えが指摘されている（金子 2021）。同じような働きかけであっても、ファシリテーターの持ち味によって、その働きかけがグループに与える影響は違ってくる。ファシリテーターの価値観、信念、経験などが、ファシリテーターの在り方に現れ、それがグループに、リアルに生々しく、影響を与えるのではないだろうか。

## 2. 5. 経営学のファシリテーション：企業組織における概念定義の検討

前節におけるヒューマンスティック・グループアプローチ視点の考察では、ファシリテーターでありつつ参加者、というスタンスが重要である、という主張があった。一方、経営学の先行研究では、ファシリテーターは第3者的存在である、という主張が見られる。ファシリテーション概念を体系的に考察した佐々木英知（2011）によると、「ファシリテーション」や「ファシリテーター」という言葉は、2000年代以降に経営の現場で頻繁に使用されるようになった。堀公俊（2003）は、企業経営の現場におけるファシリテーションとは、自律的な問題解決を論理と感情の両方から促すコミュニケーションの技術であると述べる。そしてそこには、複数人から成る集団と、その人間関係が存在する（佐々木 2011）。チェスター・I・バーナードによると、組織とは「意識的に調整された人間の活動や諸力の体系」（バーナード 1968：75）であるが、堀はそこには共通目的・貢献意欲・コミュニケーションという3要素が存在し、ファシリテーションとはこれらの要素に働きかけ、組織を活性化することであり、それにはプロセス・デザイン（process design）、プロセス・マネジメント（process management）、コンフリクト・マネジメント（conflict management）の3つのスキルが必要になると述べる（堀 2003）。堀によると、プロセス・デザインは、生産性の向上と創造的アウトプットに向けた、チーム編成や問題解決プロセス等の組立であり、プロセス・マネジメントは、その計画を円滑に進め、議論の整理と活性化を促す技術、そしてコンフリクト・マネジメントは、最終的な意思決定に至るまでのメンバー同士の葛藤を抑制し、良好に全員の合意形成を促進する技術である（堀 2003）。

また、レビューした文献では、「集団」や「グループ」、「援助」や「サポート」、「促進」及び「介入」といった単語が多く言及されていた（例えば、堀 2003；井川 2019；大本ほか 2011；佐々木 2011）。つまり、経営学のファシリテーションにおいては、集団の自律的な活動の援助が定義に含まれると考えられる。またファシリテーターは、やり取りに介入するが、中立的かつ第3者的な立場であり、実際の議論やアウトプット創出は、その集団

自身が行う(堀 2003; リース 2002)。これらの点から、ファシリテーションとは指示命令で合意形成を促すことや、講義や指導で組織成員の意識や知識を高めることとは異なると考えられる。

これらの先行研究を俯瞰すると、経営の領域でファシリテーションが活用される場は、2つに大別できると言えよう。1つめは、問題解決や会議の場である(堀 2003; 佐々木 2011)。ここでのファシリテーターの役割は、解決の筋道を決めそれを辿るよう主導するのではなく、全員が納得する自律的な合意に導くことである(堀 2003)。ときにファシリテーターは、単に会議の司会進行を担う人物と定義されるが(堀 2003; 佐々木 2011)、それは狭義の定義であり、欧米では「問題解決に向けてのコミュニケーション・プロセスをマネジメントする人」(堀 2003: 19)をファシリテーターと呼ぶ。また、これを専門とする職業もあり、「プロセス・コンサルタント」(堀 2003: 19)と呼ばれる。なお、プロセス・コンサルタントという概念を紐解いたエドガー・H・シャイン(2002)は、プロセス・コンサルタントとは、クライアントとの関係を築き、クライアント自身が気づきを得て、彼ら自身が定義した状況が改善されることだと述べる。シャイン(2002)によると、プロセス・コンサルタントは専門家として時にツールを販売する役割も担う。ここから、ファシリテーターとプロセス・コンサルタントを弁別すると、プロセス・コンサルタントは組織外の人間であり、ファシリテーションを行うだけでなく、その他ツールも使いつつ、組織内の問題解決を促進する役割と考えられる。一方、ファシリテーターとは、内部・外部にかかわらず、純粋に集団のプロセスを管理し、その自律的な合意形成や問題解決を導く人物といえよう。

企業経営でファシリテーターが着目されるもう1つの場は、企業内教育や組織開発の場である(井川 2019; 佐々木 2011)。組織開発とは、「組織のプロセスに働きかけることにより、組織の効果性(effectiveness)や健全性(healthiness)を高めようとする実践」(中村 2014: 21)である。企業内教育は成人が対象であり、一方的な講義や指導より、相互の関わり合いから学ぶほうが、意欲と効果の両面で、創造的かつ効果的な結果が得られるとの認識が広がっている(佐々木 2011)。また、組織開発では能力発揮や協働を促進するために、メンバー同士の対話促進のためのファシリテーションが行われる(中村 2014)。つまりこれらの場では、相互交流の刺激により、豊かな発想、及び深い相互理解や気づきを促すことが、ファシリテーターの役割だと考えられる。

ここまでの検討に鑑みると、経営学におけるファシリテーションでは、組織成員の能力や創造性を引き出すという企業教育や組織開発の場といった、いわば前節で言及されたヒューマンスティック・グループアプローチの目的に近い視点と、会議等の場における明確な問題解決と合意形成を目的とした視点という、2つの視点への着目が大きな特徴と言えよう。実際、ビジネス上の合意形成を目的としたファシリテーション技術の本が多くみられる。一方、学術的視点で経営学におけるファシリテーションを考察する研究は、少ないようである。働く場所や時間の柔軟性が増している企業経営においては、組織成員の納得感が高く、かつ速やかな合意形成を目的としたファシリテーションの重要性は一層高ま

奥本・前田・中西・船越・関根・上野：ファシリテーション研究とは何か：6つの学問領域における先行文献レビューを比較して  
ると考えられ、今後はさらなる理論検討と実証研究が求められていくであろう。

## 2. 6. 英語教育学におけるファシリテーション：CLIL での一例「足場作り」

教育用語として頻繁に使用されるファシリテーションという用語は、英語教育においては、教員の役割の一つであるファシリテーターの役割に関連して言及する際に使用されることが多い。例えば、大阪府英語教育委員会令和元年度英語教育改善プランによると、「中核教員はファシリテーターとして校内の英語授業改善の中心的な役割を果たすことで、各学校の英語科教員の指導力の向上を図るとともに、生徒の英語力の到達目標の設定や、教員の指導に関する意識の統一を図る」（文科省 2019：5）のような文脈で使用されている。ここでのファシリテーターは、教員が学習者の言語習得のために学校全体のカリキュラム作成や教員養成、授業環境の整備を意味する。また、英国の公的な国際交流文化機関であるブリティッシュ・カウンシルによると、英語教育におけるファシリテーションとは教員の果たしうる役割であり、教えるというよりはむしろ学習者が言語活動を達成するために必要な教材や情報、援助を供給することであると定義している。このようにファシリテーションは英語教育現場で認知されている用語ではあるが、実際には、それ自体に特化する先行研究は多くないものと思われる。昨今の教育現場におけるアクティブラーニングの台頭により、山中信幸（2018）は、教員がファシリテーターとして、教師と学習者、学習者と学習者の間に自由な関係性を築きながら、学習者自らが省察できる学習環境をつくることが重要だと述べているが、それは英語教育においても同様である。しかしながら、第2言語習得領域においてはファシリテーションの体系的研究が示されていない。このことを踏まえて、本節では Content and Language Integrated Learning (CLIL) の言語学習における教員の役割の一環としてのファシリテーションに着目し、論述する。

まず、CLIL とは内容言語統合型学習と訳され、その特徴は内容 (Content)、言語 (Communication)、思考 (Cognition)、協学 (Culture) のいわゆる 4C の統合である (池田 2016; Coyle, Hood & Marsh 2010)。CLIL 授業においては、教員と学生ならびに学生同士のインタラクションを通して学習が深められていくため、自ずとそのファシリテーションは重要となり学習成果に影響を与える。CLIL 授業では、教員が授業全体の流れを構成する際に図1のようなフローチャートが提言されており (Tanner 2015; 池田 2016)、これらがすなわち CLIL 授業における教員のファシリテーションについて概ねの目標となる。

各項目について教員は様々なファシリテーションを行うが、本節では CLIL 授業において重要視される内容 (contents) と言語 (language) の両面での足場作り (scaffolding) について言及する。CLIL 授業においては、基本的に目標言語 (英語) で授業が行われることが前提であり、教員・学習者ともに英語でコミュニケーションを行う。しかし、日本のように外国語として英語を教える English as a Foreign Language (EFL) 環境においては教員と学習者同士の母語が共通していることが多いため、授業内での母語使用を妨げない。例えば、ディスカッションの前段階で母語使用を足場作りとして認めることで、学習者は内容をより深く理解し、そのことが最終的に英語での自発的な発話に繋がる。一方、内容

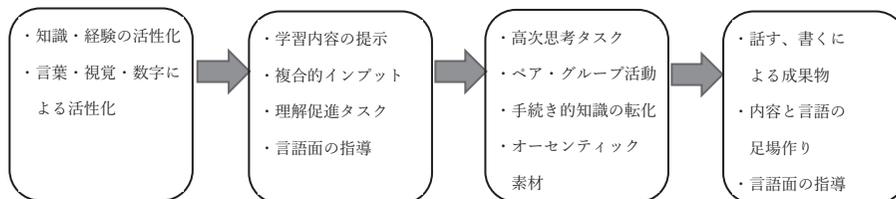


図1 CLIL 授業の流れ (池田、2016、p.17) より引用

における足場作りとしては、出来る限り本物で最新の教材を取り扱い学習者の興味を引き出すよう工夫し、批判的思考 (critical thinking) を育成できるような視点を取り入れた授業案を考案する。このような足場作りの工夫は、そのまま CLIL 授業における教員のファシリテーションの一環と言えるだろう。

本節では、英語教育学におけるファシリテーションの一例として CLIL 実践での足場作りに言及したが、ファシリテーションが授業にもたらす影響ならびにファシリテーターとしての教員の役割を考察することは、学習者の言語習得にとって非常に重要である。英語教育においては教員の役割の一つとして考えられているファシリテーションだが、実践での工夫と同時に、ファシリテーションに関連する事例研究が今後第二言語習得領域においてもさらに構築される必要があると考える。

### 3. ファシリテーション研究とはどのような研究か

本稿では、6つの学問・研究領域の視点で、先行文献をもとに「ファシリテーションとは何か」という問いに答えた。ただ、紙面の制限や6人の執筆者の関心領域により、各学問・研究領域内の先行研究を必ずしも包括的・網羅的にレビューしたものではない。不完全なレビューであることを認めつつ、6つの先行文献レビューの比較から、学際的な観点から「ファシリテーション研究はどのような研究か」、すなわちファシリテーション研究の特徴について考察した結果をいくつか述べたい。

第1に、ファシリテーションに関する議論の深度や方向性が、各学問・研究分野で異なることが示された。国際開発学・平和学・心理学では、実践だけでなく、その実践を支える理念や理論に関する議論もなされている。一方で、経営学・英語教育学においては、ファシリテーションという用語は浸透しているものの、実務・実践に関する議論が中心になっている。そして、社会学においては、これまで議論がほとんどなされていない。

第2に、ファシリテーションという事象が、さまざまな側面から分析・考察できることが示唆された。6つの先行文献レビューには、以下のような特徴があった。まず、焦点の当て方の違いとして、ファシリテーションを支える理念・理論 (国際開発学・平和学)、ファシリテーターの立ち位置 (平和学・心理学・経営学)、ファシリテーションの具体的実践例 (英語教育学) などがあった。一方で、共通して考察された側面としては、ファシリテーターに求められる役割・機能があった。

奥本・前田・中西・船越・関根・上野：ファシリテーション研究とは何か：6つの学問領域における先行文献レビューを比較して

第3に、各学問分野・研究領域におけるファシリテーションの議論においては、共通のルーツや相互の影響が見受けられることが示された。例えば、国際開発学と平和学のファシリテーションはブラジル民衆運動家（各レビューで言及したパウロ・フレイレとアウグスト・ポアール）の影響を受けているという共通点がある。また、平和学のレビューでは、心理学の影響を受けていることを指摘している。

## 4. おわりに

以上、6つの学問・研究領域の先行文献をレビューし、学際的な観点からみたファシリテーション研究の特徴を列挙した。しかし、本稿はあくまで学際的研究の第一歩にすぎない。引き続き、本稿で扱うことができなかつた様々な研究領域を含めて、ファシリテーションに関する議論を深めていく必要があるだろう。

著者らは今後もこの課題に取り組んでいくつもりである。本稿は、大阪女学院大学国際共生研究所の「ファシリテーション・メディエーション研究プロジェクト」のメンバーによって執筆された。第2章の6つの先行文献レビューは、順に、関根聡、前田美子、奥本京子、中西美和、船越多枝、上野育子が担当した。

なお、引用・参照した文献は、原則、日本語のものとした。原書が日本語でない場合は、執筆時点において翻訳書がある場合は翻訳書を優先し、文献リストに原著出版年を明記した。

### 引用・参考文献

- 井川浩輔（2019）「ファシリテーション・トレーニングの効果に関する予備的分析」『琉球大学・経済研究』98, 1-19.
- 池田真（共編）（2016）『CLIL 内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たな挑戦 第3巻授業と教材』上智大学出版.
- 井上義和（2018）「『アクティブラーニングの教育社会学』討論の記録」『日本教育社会学会第70回大会課題研究Ⅲ・公開研究会』1-15.
- 太田美帆（2004）『生活改良普及員に学ぶファシリテーターのあり方－戦後日本の経験からの教訓－』国際協力機構国際協力総合研究所.
- 大本義正・戸田泰史・植田一博・西田豊明（2011）「議論への参加態度と非言語情報に基づくファシリテーションの分析」『情報処理学会論文誌』52（12），3659-3670.
- 奥本京子（2022）「平和教育のためのファシリテーション・アプローチ」『平和創造のための新たな平和教育－平和学アプローチによる理論と実践』高部優子・奥本京子・笠井綾編著，法律文化社.
- 金子周平・白井祐浩・田中将司・古賀なな子・平井もも（2021）「ファシリテーター機能自己評価尺度の作成と妥当性の検証」『人間性心理学研究』38（2），199-208.
- ガルトウング，J.（2014）『ガルトウング紛争解決学入門：コンフリクト・ワークへの招待』藤田明史・奥本京子監訳，トランセンド研究会訳，法律文化社。（原著出版，2004）
- 岸政彦（2016）「質的調査とは何か」『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』岸政彦・石岡丈昇・丸山里美著，有斐閣ストゥディア，28-29.

- 佐々木英知 (2011) 「ファシリテーター概念に関する理論的考察－ファシリテーション実践の体系的把握につなげるための覚書－」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』 34, 129-136.
- 佐藤寛 (編) (2003) 『参加型開発の再検討』 アジア経済研究所.
- シャイン・E. H. (2002) 『プロセス・コンサルテーション 援助関係を築くこと』 稲葉元吉・尾川丈一訳, 白桃書房. (原著出版, 1999)
- ゼア, H. (2008) 『責任と癒し：修復的正義の実践ガイド』 森田ゆり訳, 築地書館. (原著出版, 2002)
- 高橋紀子 (2012) 「グループファシリテーション」『人間性心理学ハンドブック』 人間性心理学会編, 創元社.
- チェンバース, R. (2000) 『参加型開発と国際協力:変わるのはわたしたち』 野田直人・白鳥清志監訳, 明石書店. (原著出版, 1997)
- チェンバース, R. (2004) 『参加型ワークショップ入門』 野田直人監訳, 明石書店. (原著出版, 2002).
- 中澤秀雄 (2016) 「コモンセンス・ファシリテーターとしての社会学」『現象と秩序』 4, 3-18.
- 中村和彦 (2014) 「対話型組織開発の特徴およびフューチャーサーチと AI の異同」『人間関係研究 (南山大学人間関係研究センター紀要)』 13, 20-40.
- 日本平和学会「平和教育プロジェクト委員会」 Retrieved from <https://www.psj.org/> 平和教育プロジェクト/(2021年8月31日検索)
- 野島一彦 (2011) 「二年間のファシリテーター養成プログラム」『グループ臨床家を育てる ファシリテーションを学ぶシステム・活かすプロセス』 野島一彦監修, 高橋紀子編, 創元社.
- 野田直人 (2003) 「「参加型開発」をめぐる手法と理念」『参加型開発の再検討』 佐藤寛編, アジア経済研究所.
- バーナード, C. I. (1968) 『新訳 経営者の役割』 山本安二郎・田杉競・飯野春樹訳, ダイヤモンド社. (原著出版, 1938)
- ヒッキー, S. & モハン, G (編) (2008) 『変容する参加型開発:「専制」を超えて』 真崎克彦監訳, 明石書店. (原著出版, 2004)
- FASID (財団法人国際開発高等教育機構) (2004) 『PCM 開発援助のためのプロジェクト・サイクル・マネジメント 参加型計画編』 FASID.
- 藤垣裕子 (2002) 「社会受容のための科学技術－社会的リスク論」『日本金属学会誌』 66, 12, 1246-1252.
- ボアール, A. (1984) 『被抑圧者の演劇』 里見実・佐伯隆幸・三橋修訳, 晶文社. (原著出版, 1975)
- 堀公俊 (2003) 『問題解決ファシリテーター「ファシリテーション能力」養成講座』 東洋経済新報社.
- ミンデル, A. (2013) 『ワールドワーク:プロセス志向の葛藤解決、チーム・組織・コミュニティ療法』 富士見ユキオ監訳, 青木聡訳, 誠信書房. (原著出版, 1989)
- 村山正治 (2014) 「ファシリテーター論」『「自分らしさ」を認める PCA グループ入門 新しいエンカウンターグループ法』 村山正治編著, 創元社.
- 文科省 (2019) 『令和元年度英語教育改善プラン』 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2019/06/21/1418088\\_007.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/06/21/1418088_007.pdf) (2021年8月7日検索)
- 山中信幸 (2018) 「ファシリテーターとしての教師の養成－豊かな心を育む生徒指導の実践者の養成に向けて－」『川崎医療福祉学会誌』 27 (2), 269-277.

奥本・前田・中西・船越・関根・上野：ファシリテーション研究とは何か：6つの学問領域における先行文献レビューを比較して

Retrieved from [http://www.kawasaki-m.ac.jp/soc/mw/journal/jp/2018-j27-2/P269-P277\\_yamanaka.pdf](http://www.kawasaki-m.ac.jp/soc/mw/journal/jp/2018-j27-2/P269-P277_yamanaka.pdf) (2021年8月8日検索)

リース, F. (2002) 『ファシリテーター型リーダーの時代』 黒田由貴子・P. Y. インターナショナル訳, プレジデント社. (原著出版, 1998)

ローゼンバーグ, M. B. (2012) 『NVC 人と人との関係にいのちを吹き込む法』 安納献監訳, 小川敏子訳, 日本経済新聞出版社. (原著出版, 2003)

和田信・中田豊 (2010) 『途上国の人々との話し方：国際協力メタファシリテーションの手法』 みずのわ出版.

Aveline, M. O. (1993) Principles of Leadership in Brief Training Groups for Mental Health Care Professionals. *International Journal of Group Psychotherapy*, 43 (1), 107-129.

British Council (n.d.) Website Teaching Knowledge Database.

Retrieved from <https://www.teachingenglish.org.uk/article/facilitation> (2021年8月8日検索)

Chen, M. & Rybak, C. (2003) *Group Leadership Skills: Interpersonal Process in Group Counseling and Therapy*. Brooks/Cole Pub Co.

Cooke, B. & Kothari, U. (Eds.) (2001) *Participation: The new tyranny?* Zed Books.

Coyle, D., Hood, P. & Marsh, D. (2010) *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press.

Kapoor, I. (2002) The devil's in the theory: A critical assessment of Robert Chambers' work on participatory development. *Third World Quarterly*, 23 (1), 101-117.

Kraybill, R. & Wright, E. (2006) *The Little Book of Cool Tools for Hot Topics: Group Tools to Facilitate Meetings When Things Are Hot*. Good Books.

Pranis, K. (2005) *The Little Book of Circle Process: A New/Old Approach to Peacemaking*. Good Books.

Scheidlinger, S. (1982) *Focus on Group Psychotherapy: Clinical Essays*. International Universities Press.

Tanner, R. (2015) Mini CLIL skills: A summary of CLIL skills (2010) by Liz Dale, van der Es, W., & Rosie Tanner, private edition.

White, S. & Pettit, J. (2004) Participatory methods and the measurement of well-being. In N. Kenton (Ed.), *Participatory Learning and Action: Critical reflections, future directions 50 International Institute for Environment and Development*. 88-96.

